

校長メッセージ ～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校 丹羽

「寛容」であるということ

今回は、本校の4つの校風の一つ「恕」Open-mindについて考えてみたいと思います。そのために参考となる記事が「教職研修」2月号の巻頭インタビューにありました。国際基督教大学教授（哲学・宗教学）の森本あんり氏のお話です。

（前略）

▶最低限の礼節があれば共存できる

寛容は、相手を善と認めなくても、好きにならなくてもかまわないのです。最低限の礼節さえ持っていれば、共存はできます。逆にいうと、私たちにできるのはそこまでです。

内心は変えられませんし、無理に変えるべきでもありません。内心で思うことは、人の自由です。ただ、思ったことを何でも公共の場などで言うてはいけません。人を傷つけない。人権を守る。それが最低限の礼節だということです。本音と建前は、誰もが違うからです。

心の中と言動が違っていいのです。人間である以上、仕方ありません。むしろそこを守ることが、寛容であることなのです。これは学校でもぜひそう教えていただきたいと思います。内心に点数をつけることなどではなく、守るべき礼節を教えることです。

一礼節とは具体的にどんな態度でしょうか。

今は、自分と異なる考えの人と一緒にいることすらできない人が増えていますね。人と人のつながりが、似た考え方をする身内だけになっています。思想が異なる人とのつながりが減っていることが、自分（たち）の信念をさらに踏み固めて頑固にしています。

ですから、違う信念の人と同じ空間にいて、自分は黙って相手の言葉を聞く時間を持つことが出発点だと思います。お互いに黙っていてもかまいません。波長を合わせる時間、ラポールをつくる時間を持つことです。

人間はファクト（事実）だけで生きているわけではありません。ファクトに意味を与えるコンテキスト（文脈）が大切なので、そこに影響を与えるきっかけとなり得るのは、人間関係しかありません。

自分のことをわかっていてくれていると思えば、人は徐々に心を開いてゆくでしょう。そういうところから解きほぐすことです。

▶近代教育の難点

近代の教育は「人間は、教育をすればよくなる」という信念のもとにつくられてきました。実は、その信念が不寛容な結果をもたらすこともあります。誰もが「よくなる」ための教育を施されるなら、それでも「よくなる」人は社会から排除・隔離すべきだという思想につながるからです。だから歴史的に見ると、近代ヒューマンイズムは、社会的逸脱に対しては中世より不寛容な面があります。

かといって、そういう人たちは教育をせずに放っておけばよいわけではないでしょう。教育をいう仕事には、どうしても寛容と不寛容の矛盾がついて回ります。これからの大きな論点です。

一まさに「個別最適な学び」に通ずるところだと思います。ありがとうございました。

本校では、学習活動に「聴き合う関係に支えられた協同的な学び」を取り入れています。この学習では活発に話し合ったり教え合ったりする押し付けがましいお節的な関係は求めません。仲間のわからなさに寄り添い、優しい気遣いができる関係を求めます。これこそが「恕」の心の表れだと考えています。これは森本あんり氏が言うところの「波長を合わせる時間、ラポールをつくる時間を持つ」とことと共通することです。つまり、授業で寛容な心を育て、一人一人の居場所と幸せを大切にす校風を実現しようとしています。